

平成 29 年 度 卒 業 論 文

作品に用いられている自転車の意味と役割

国 語 表 現 ゼ ミ ナ ー ル
指 導 教 員 野 浪 正 隆 先 生

教 員 養 成 課 程 国 語 教 育 専 攻 小 学 校 コ ー ス
1412137 山 崎 靖 弘

(400 字 詰 め 原 稿 用 紙 換 算 112 枚)

平成 30 年 1 月 31 日 提 出

目次

第一章	研究にあたって	…p. 1
第一節	研究動機	…p. 1
第二節	研究対象	…p. 2
第三節	研究方法	…p. 5
第二章	作品の分析結果	…p. 6
第一節	項目集計による分析	…p. 6
第一項	自転車について	…p. 6
「その場面で自転車に乗車しているか」		…p. 6
「登場する自転車の車種」		…p. 8
「自転車が走行するまたは登場する場所」		…p. 9
「その場面の時間帯」		…p. 13
「その場面の時期」		…p. 14
「自転車の速度」		…p. 16
第二項	自転車に乗車する人物	…p. 18
「乗車する人物の性別」		…p. 18
「乗車する人物の年齢・特徴、職業」		…p. 19
「乗車している人物が主人公かそれ以外か」		…p. 21
「乗車している人数」		…p. 21
「自転車に乗車する目的またはその目的地」		…p. 23
第三項	対象作品について	…p. 25
「対象における場面の位置」		…p. 25
「対象の発表年」		…p. 26
「対象のメディア」		…p. 26
第二節	分析結果についての考察	…p. 27
第三章	まとめと今後の課題	…p. 28
第一節	まとめと今後の課題	…p. 28
第二節	終わりに	…p. 28

第一章 研究にあたって

第一節 研究動機

私は大学まで自転車で通学していることもあって、自転車に興味・関心を持っている。だから、「弱虫ペダル」や「トリガール」などの、自転車を取り上げた作品が流行っていることも嬉しく感じていた。けれども、自転車の誕生自体は、1885年に現在の原型となるものが発明されており、それから100年以上経った今流行っていることになる。いったいなぜ、今そういった作品が流行っているのか疑問を抱いた。そこで、作品に登場する自転車の役割を研究しているものを探したが、詳しい意味合いや役割などは研究されていなかった。これは、文学の歴史から見ると、自転車の誕生が比較的新しいからだろう。しかし、現代の多くのメディアには、自転車が登場している。それらはいったいどういう意味を持っているのか。そこで、様々なメディア内において、自転車がどのような意味や役割を持つかを明らかにしていきたいと思う。

第二節 研究対象

自転車を使用されているメディアの中で、小説、歌詞、漫画、映像の4つに当てはまるものを合計個集め、研究の対象とする。対象は以下の75作品、160場面である。

作品名	場面数
AKB48 「2人乗りの自転車」	1
Aqua Timez 「自転車」	2
BUMP OF CHICKEN 「車輪の唄」	2
DREAMS COME TRUE 「DA DIDDLY DEET DEE」	1
the pillow 「白い夏と緑の自転車 赤い髪と黒いギター」	1
「さんりんしゃだいすき」	1
さだまさし 「51」	1
つじあやの 「風になる」	1
ゆず 「夏色」	1
オレスカバンド 「自転車」	1
オー・ヘンリ／大久保康雄 「赤い酋長の身代金」	1
カホーティ／龍口直太郎 「クリスマスの思い出」	2
ケツメイシ 「1日」	1
コナン・ドイル／延原謙 「「S・ホームズの冒険」 オレンシンの種五つ」	1
コブクロ 「Million Films」	1
コブクロ 「memory」	1
シリトー／丸谷オー／河野一郎 「シム・スカーフィテ イルの屈辱」	1
シリトー／丸谷オー／河野一郎 「フランキー・フラー の没落」	1
シリトー／丸谷オー／河野一郎 「土曜の午後」	1
シリトー／丸谷オー／河野一郎 「試合」	1
シリトー／丸谷オー／河野一郎 「長距離走者の孤独」	1
スピッツ 「ロビンソン」	1
トーマス・マン／高橋義孝 「トニオ・クレーケル」	1

ヒルトン／菊池重三郎「チップ°ス先生さようなら」	1
ヘルマン・ヘッセ／高橋健二「車輪の下」	1
ポルノグラフィティ「Aokage」	2
ユニコーン「自転車泥棒」	2
七月隆文「僕は明日、昨日のきみとデートする」	3
井伏鱒二「黒い雨」	1
伊坂幸太郎「アイネクライネナハトムジーク」	2
俵万智「サラダ記念日」	1
吉行淳之介「樹々は緑か」	1
夏目漱石「三四郎」	1
夏目漱石「坊ちゃん」	1
夏目漱石「夢十夜」	1
夏目漱石「我輩は猫である」	1
夏目漱石「自転車日記」	1
夏目漱石「虞美人草」	1
大塚愛「さくらんぼ」	1
宮崎吾朗「コクリコ坂から」	12
宮崎駿「となりのトトロ」	8
宮崎駿「千と千尋の神隠し」	1
宮崎駿「風立ちぬ」	9
宮本輝「錦繡」	1
尾田栄一郎「ONE PIECE 第34巻」	1
山田尚子「聲の形」	2
岩野泡鳴「毒菓を飲む女」	1
島崎藤村「新生」	1
嵐「アオゾラペダル」	1
川村元気「世界から猫が消えたなら」	4
恩田陸「ドミノ」	1
恩田陸「六番目の沙代子」	4
恩田陸「夜のピクニック」	1
新海誠「君の名は。」	6

松山千春「MY 自転車」	1
梶井基次郎「ある心の風景」	1
梶井基次郎「城のある町にて」	1
槇原敬之「Are You OK_」	3
槇原敬之「LOVE LETTER」	1
槇原敬之「No.1」	1
槇原敬之「三月の雪」	1
槇原敬之「君の自転車」	3
笠野祐一「じてんしゃにのって」	1
米林宏昌「メアリと魔女の花」	2
米林宏昌「思い出のマーニー」	6
細田守「バケモノの子」	4
細田守「時をかける少女」	10
芥川龍之介「歯車」	1
葛西善蔵「湖畔手記」	1
近藤喜文「耳をすませば」	18
長渕剛「10年前の帽子」	1
開高健「ハニック」	1
開高健「巨人と玩具」	1
阿川弘之「山本五十六」	1

第三節 研究方法

自転車が出てきた部分を集め、次の項目などから作品における自転車の役割を探す。

項目群1 自転車について

- その場面で自転車に乗車しているか
- 登場する自転車の車種
- 自転車が走行するまたは登場する場所
- その場面の時間帯
- その場面の時期
- 自転車の速度

項目群2 自転車に乗車する人物

- 乗車する人物の年齢・性別・特徴、職業
- 乗車している人物が主人公かそれ以外か
- 乗車している人数
- 自転車に乗車する目的またはその目的地

項目群3 対象作品について

- 対象における場面の位置
- 対象の発表年
- 対象のメディア

項目群1では自転車が登場する状況を分析することで、自転車の用いられ方の特徴を掴むことが狙いである。自転車といえば「坂道」のようなイメージがあるが実際にはどうなのか、それがどういった意味を持つのかといったことを分析する。

項目群2では自転車に乗車する人物を分析していく。これは、自転車が象徴的に成っている例として次のようなものがあるからだ。カザフスタンなどのイスラム教の国では、女性は自転車に乗るものではないとされていた。そのため、自転車に乗るということは女性にとって自由、自立の象徴とされているという。この例のように、自転車に乗車するものの特徴を分析することで、自転車の象徴性も見えてくると考えられる。

項目群3では、どういった作品に自転車が用いられるのか考えていく。特に、自転車が発明されたのは近代のことであるので、対象が発表された年代を見ることによって特徴が掴めると考えられる。

以上の項目を踏まえた上で、作品ごとに自転車の用いられ方の特徴を分析する。

これらを総合し関係性を見ることで、最終的に自転車の象徴性を考えていく。

第二章 作品の分析結果

第一節 項目集計による分析

第一項 自転車の状況

・その場面で自転車に乗車しているか

乗車	はい	いいえ	どちらも	なし
数	95	61	2	1

誰かに乗車されている自転車が多くを占めていると予想していたが、上記のように乗車されていない状態でも多く用いられている。乗車されていない場合はいったいどのように使用されているのだろうか。以下は、乗車されていない自転車の用いられ方をまとめたものである。

会話	停止	押されている	抱えられている
27	18	11	1

上記のように自転車に乗車していない場合の用いられ方は、その半数が会話中や地の文である。それらの中では、距離の目安などに用いられていることが多い。移動手段としての自転車の意味合いが強い。

残りの半数では、自転車は停止状態であるか押されている状態である。そのうち停止状態の自転車は、駐輪場などの混雑した場所で登場したり、転んだ状態で用いられたり、ゴミとして登場したりしている。移動するという本来の役割を果していない自転車はメリットの部分が無くなり、危険性や環境問題などのデメリットの部分が浮かび上がってきた状態になっているのだ。つまり、停止中の自転車というのはマイナスの意味を持って用いられているのではないだろうか。

押されている状態の自転車をみると、その多くが複数人である場合に用いられている。自転車の持ち主と、自転車を持っていない人間がいる場合、押して歩くというわけである。この場合、彼らは男女問わず親密な関係であり、自転車が彼らの空間を作り出していると考えられる。少数ではあるが、一人で自転車を押している場合もある。その場合は、必ず別れを想起する場面になっている。押されている自転車が作り出す空間は、一人きりで思考するのに良いということだろう。以下は、押されている自転車の一例である。

	宮崎吾朗「コクリコ坂から」
乗車	いいえ
車種	実用車
場所	通学路
時間	放課後
時期	5月－6月
年齢	16、17
性別	男、女
人物	学生
主人公	主人公、以外
人数	2
目的	帰宅、話す
目的地	家
速さ	押している

	槇原敬之「LOVE LETTER」
乗車	いいえ
車種	なし
場所	駅前
時間	夕暮れ
時期	なし
年齢	なし
性別	男
人物	なし
主人公	主人公
人数	1
目的	帰宅
目的地	家
速さ	押している

乗車されていない自転車は、こういったようにマイナスの意味を持ったり空間を作ったりして使用されていることが分かった。これからの分析では、乗車されている自転車について考えていく。

・登場する自転車の車種

車種	なし	実用車	ママチャリ	ツーリング用自転車	ボロ自転車
数	52	43	25	8	3

その他の項目は以下の通りである。「いとも見苦しかりける男乗」、「タイヤの空気が抜かれた」、「ちりんちりと、なるベルと、グローブやバットをのせられるにだが、ちゃんとしているすてきなじてんしゃ」、「つながれた犬みたいな置き去りの自転車」、「ニューモデルのMY自転車、5段変速」、「ボロ自転車」、「修理中の自転車」、「派手なペンキ塗りの広告板を胴中にぶら下げた自転車」、「無灯火の自転車」、「緑の自転車」

ここでは、対象の場面に登場する自転車の車種を分析していく。表中で一番多い実用車というのは、その名の通り、重い荷物を運ぶことなどに長けた自転車である。現在でも、一部の職業等で使用されている。今回の対象では、スタジオジブリの作品に登場する自転車である。この実用車がママチャリを抜いて多いのは、実際は集計の「なし」の中にママチャリが含まれているからだと考えられる。現代で自転車といえどもママチャリだろうというほど普及しており、わざわざ車種まで言及されていないのではないかと。そこから言うと、欄外にあるように、どういった自転車かあえて書いてあるものは、それなりの意図が込められていると考えられる。

「ちりんちりと」から始まる自転車は、子どもに送られた自転車の描写である。細かい特徴まで書いてあるのが、子どもの高揚感を感じさせる。「ニューモデルのMY自転車、5段変速」も同じである。逆に、「つながれた犬みたいな置き去りの自転車」をはじめとして、マイナスのイメージを感じさせる表現もある。このように、車種の分析から分かったことは、自転車の車種へと言及することによって、人物の感情をそこに表されているということだ。

・ 自転車が走行するまたは登場する場所

場所	数
なし	54
坂	19
通学路	12
河川敷	8
駐輪場	5
会社	3
商店街	3
町	3
踏切	3
郵便局	3
駅前	3
弥生町の門の往来	1
夢	1
分かれ道	1
風を凌げる細い小道	1
畑の道	1
井の頭通り	1
湖のほとり	1
バス停前	1
学校	1
外苑沿いのレンガ道	1
海	1
家の近所	1

場所	数
道路への階段	1
北牟婁	1
森	1
町の大通り	1
中禅寺	1
地球屋	1
団地前	1
川の神の体の中	1
赤信号	1
図書館前	1
イギリス	1
自転車屋	1
四谷	1
荒神橋	1
港	1
校庭の一隅にある自転車置場	1
広島	1
広場	1
公園	1
空中	1
家の横	1
銀行	1
あの町	1

ここでは、自転車の走行する場所について見ていく。自転車といえば坂道じゃないだろうかという事前の予想通り、坂道で一番自転車が用いられていた。内訳は、上り坂が11で下り坂が8である。現実世界には上り坂も下り坂も等しくあるが、少し上り坂が多くなっている。これは多くの作品で、上り坂と下り坂のどちらかしか使用されていなかったから起きた偏りだろう。ここからは上り坂と下り坂を比較しながら分析していきたい。

上り坂は当然だが自転車のスピードが落ちる。体力も余計に使うしできれば上りたくない。そんな上り坂を自転車で上る目的を見てみると、帰宅や登校といった普通の目的とは異なるものが多い。「夢の国へ行く」、「決心をして人に会いに行く」、「別れのために人を送る」、「仲直りをするために」、「恋のうたを届ける」、「日の出を君と見る」といったものである。どの目的を見ても、覚悟や決心が必要な困難なものになっている。これは、自分の力で動かす自転車が覚悟や決心を、上り坂を上ることが困難を意味しているのではないだろうか。以下は一例である。

	BUMP OF CHICKEN 「車輪の唄」
乗車	はい
車種	錆び付いた車輪
場所	線路沿いの上り坂
時間	明け方→朝
時期	なし
年齢	なし
性別	男、女
人物の特徴、職業	なし
主人公	主人公、以外
人数	2
目的	君を駅へ送る
目的地	駅
速さ	なし

上り坂に反して、下り坂を下る時は必然的にスピードが出る。実際、そういった用いられ方の場面が多くあり、爽快感を感じさせている。一方で、ゆずの「夏色」にある下り坂をくだっていく場面では、ゆっくりゆっくりという描写がされている。このような「ゆっくり」というスピードは、他の作品では見られなかった。なぜこの作品だけ違うのだろうか。他と違うところを探していると、この作品では二人乗りだということに気づいた。後ろに乗せている人間は元気づけてあげたいほどの関係のようで、その人の安全を考えるとゆっくりゆっくりになるのだろう。また、「長い長い下り

坂」を「ゆっくりゆっくり」下っていくのだから、相当の時間がかかると思われる。これは、後ろに乗せた人間との時間が長く続けばいいという、前に乗る人間の心の現れと考えられるのではないだろうか。とすれば、この作品で自転車は二人の空間を作り出すように用いられていることになる。以上のように、坂道は坂道でも、上り坂の自転車は困難と覚悟を、下り坂の自転車は爽快感をといたように自転車の意味合いが変わってくる。以下は分析に用いた表である。

	ゆず 「夏色」
乗車	はい
車種	なし
場所	長い長い下り坂
時間	五時半
時期	夏
年齢	なし
性別	男、女
人物	なし
主人公	主人公、以外
人数	2
目的	元気付ける
目的地	海
速さ	ゆっくりゆっくり
場面	序盤、終盤（サビ）
発表年	1998

坂道の次に通学路が多いのは、自転車に乗車する人物に学生が多いためだろう。詳しくは、後の乗車する人物についての分析で触れたいと思う。

次に多いのは河川敷となっている。河川敷は歩行者と自転車だけの空間で、安全であることもあり、自転車が登場しやすいのだろう。また、川沿いということが、自転車をこいで風を受ける爽快感をよりイメージさせるのではないか。信号や車に自転車を漕ぐ邪魔をされることもない。自転車が元々持っている爽快感を、河川敷によって引き出すことができるのである。河川敷での自転車は、そういった爽快感を感じさせる用いられ方がされているのだろう。下記もそのように用いられている。

	嵐 「アオゾラペダル」
乗車	はい
車種	なし
場所	河川敷
時間	なし
時期	なし
年齢	なし
性別	男、女
人物の特徴、職業	なし
主人公	主人公、以外
人数	2
目的	あの時の君の笑顔 思い出そうとして
目的地	なし
速さ	全力

駐輪場は、「乗車の状態」の分析で触れたように、マイナスのイメージを持たせる時に設定されているのではないか。踏切や線路脇という場所は、自転車の他に電車も登場することが考えられるので、それらの対比が分析できるような作品を集めることが今後の課題である。、その他の場所は、地名や特殊な場所もあり数が集まらなかったため、分析することができなかった。また、車種におけるママチャリと同じように、自転車が走るのは道路がほとんどなので、「なし」となっている項目の中に道路が含まれていると考えられる。

・その場面の時間帯

時間	なし	夕方	昼	朝	夜	放課後	早朝	未来	五時半	停止	八時半	午後4時
数	68	21	21	17	13	5	5	2	1	1	1	1

これは自転車が用いられている場面の、時間設定の項目を表にしたものである。日中はほぼまんべんなく使用されており、夜や早朝といった時間でも使用されている。

「放課後」は実質夕方だと考えられるが、描写の通りに項目を設けることにした。時間帯を調べる上で特徴的なものがあったので、下記のような表を作った。

人数												
		1	1×複数	1→2	1、1	1、2	2	2→1	3	5	なし	複数
時間	なし	30	3	0	1	0	7	0	0	0	23	1
	なし、朝	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	ふた月前の夏の日	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	よる	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	五時半	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	今から未来	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
	停止	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	八時半	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	午前	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	午後4時	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	夕方	9	0	1	0	0	9	0	0	0	0	0
	夕方過ぎ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	夕暮れ	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	夕暮れ時	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	夜	6	0	0	0	0	1	0	0	0	2	1
授業を抜け出し	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	
放課後	2	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	

日没後	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
早朝	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
明け方	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
明け方→朝	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
明るい	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0
昼	4	0	0	0	0	4	1	0	1	6	0	0
昼過ぎ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
朝	9	0	0	0	0	2	0	0	0	1	1	0

この表は、時間と乗車人数の関係を表したものである。中央の水色の部分、夕方の時間帯に注目すると、その時に最も二人乗りが多くなっていることが分かる。これは学生の活動時間である為と考えられるが、詳しくは後の乗車する人物で触れることにする。

このように、時間帯だけでは自転車の用いられ方の特徴を分析するのは困難だった。この後の項目分析と絡めて見ていくことにしたい。

・その場面の時期

時期	なし	夏	5 - 6月	夏休み	9月	梅雨	秋	日曜日	冬	春
数	85	19	12	10	8	8	7	3	2	2

季節を確認できるものを集めると、若干多く夏頃の季節に用いられていることがわかる。「自転車と汗」というイメージと関係があるのかもしれないし、学生が乗車することが多いことが関係しているのかもしれない。ロードレースは体が動きにくい冬場がオフシーズンと言われるように、冬には登場しにくいのだろうか。だが、冬場に行われるロードレースもあるし、乗ろうと思えばいつでも自転車に乗ることはできる。自転車はいつの季節を設定しても、用いることができるだろう。しかし、今回対象とした作品では季節を明示したものが少なく、この項目の分析は今後の課題としたい。

・自転車の速度

速度	数
なし	55
普通	31
停止	21
押している	11
速い	11
ゆっくり	10
どんどんスピードが上がる。	1
ゆっくり→停止	1
下り坂	1
不明	1
停止、普通	1
全力	1
全速力	1
坂道を 滑り降りてく	1
思い切り	1
抱えている	1
汗だくで走った	1
立漕ぎ	1
街も風も すりぬけてくように	1
走り過ぎて	1
追い風に乗った	1
速い→押している	1
速いと思われる	1
風よりも早く飛ばしていく	1
飛ばして	1
駆けのぼる	1

ここでは、自転車の速度に関して分析していく。「押している」と「停止」は、自転車に乗車していない時の分析でも触れた。この二つは乗車しては出せない速度

なので、乗車していない時のみ現れるスピードである。これらのスピードの自転車は、マイナスの意味を持ったり空間を作ったりして使用されていることが分かった。

停止している自転車にも意味はあったが、やはり自転車の本領発揮は動いている時だろう。さらに言えば、風を切るくらいのスピードが魅力的である。そのように自転車を速く漕ぐのは、いったいどんな時なのか。それを分析するために、乗車している人物とスピードの関係を見てみる。すると、「速い」の時に自転車を漕いでいるのは、一つの場面を除いて、全て学生なのである。「速い」の他にも、「立漕ぎ」や「思い切り」などの高い速度を表す描写がされている時、その漕ぎ手のほとんどが学生なのである。自転車を速く漕ぐということは、もちろん体力がないとできることではない。若いことが、速さを出す一つの条件となる。もう一つ学生が適している条件として、成長するにつれ全力で漕ぐのが恥ずかしくなるというのがある。学生の年齢を超えれば、急ぐときは他の交通手段を利用するだろう。この二つの条件が揃っているからこそ、学生がスピードを出すことが多いのだろう。このように、学生が自転車を速く漕ぐ時は、そこから若さと全力を読み取ることができる。

	BUMP OF CHICKEN 「車輪の唄」
乗車	はい
車種	錆び付いた車輪
場所	線路沿いの下り坂
時間	朝
時期	なし
年齢	なし
性別	男
人物の特徴、 職業	なし
主人公	主人公
人数	1
目的	君に追いつけと
目的地	君
速さ	風よりも早く飛ばしていく

また、スピードに関して付け加えると、今回はロードレースなどの競技自転車を取り扱った作品を対象としなかった。これは、自転車全体を分析するためにそうした。だが、今後の展望としては、競技自転車のみを取り上げて分析するというのも考えていきたい。スピードを追求する競技自転車なので、今回とは違う結果が出るのは間違

いないだろう。

・自転車についてのまとめ

ここまで、対象作品に登場する自転車について見てきた。この時点での自転車の用いられ方は、次のようにまとめることができる。自転車に乗車していない時は、自転車のメリットが薄れデメリットの部分が浮き出て用いられる。しかし、押している場合には、二人の空間を作り出す役割がある。車種についての細かい描写がされている時は、自転車に人物の感情などが表されている。自転車が走行する場所の特徴として、主に坂道が挙げられる。その中でも、上り坂は困難を表し、下り坂は爽快感を感じさせる。時間帯や時期の分析は今後の課題である。速いスピードを出すことは学生の特権で、若さと全力さが自転車に象徴されている。以上をまとめとして、次の第二項自転車に乗車する人物に移っていきたい。

第二項 自転車に乗車する人物

・乗車する人物の性別

性別	男	なし	男、女	女	女、女	男、男	男、女、女	男、男、女	男、女、女、女、女
数	60	41	29	17	4	3	2	2	1

第二項に移った最初は、乗車する人物の性別から見ていく。男女比をみると、男性が102で女性が64となっていて、男性が1.5倍程度多い。第三節の研究方法の部分でも述べたが、カザフスタンなどのイスラム教の国では、女性は自転車に乗るものではないとされている。そのため、自転車に乗るということは女性にとって自由、自立の象徴とされているという。日本でも、自転車が庶民の間に普及するまでは、女性が自転車に乗るものではないとされていた。昭和の作品ばかり集めたわけでもないのにこの差があるということは、まだその頃の名残りが小説等の分野には残っているのだろうか。

この表の「男、女」というのは、多くが二人乗りを指している。これを人物の特徴・職業との関わりでみると、その多くが学生であることが分かる。古くは貴族のロマンスの場だった二人乗りだが、今日では学生のものとなっている。自転車を押している場合の分析でも述べたが、空間を作り出す役割を自転車が担っているのである。法律によって二人乗りが規制されているのにも関わらず、未だに二人乗りの学生が描かれるのはそれだけ特別なだからだろう。

・乗車する人物の年齢・特徴、職業

年齢の表

年齢	数
なし	82
大人	25
学生	10
子ども	8
17	7
15	5
青年	3
18	2
30	2
32	2
14	2
4	2
12	2
16	1
20	1
22	1
23	1
35	1
39	1
48	1
少年	1
無邪気だった季節	1

特徴・職業の表

特徴・職業	数
なし	90
学生	36
親子	7
配達員	6
少年	4
小学生	2
整備士	2
老人	2
かっぱ	1
サラリーマン	1
プログラマー	1
半分大人になりかけたような少年	1
大学生	1
教師	1
海軍大将	1
番頭	1
舞踏会の客	1
警備員	1
警察	1
貧乏人	1

自転車に乗車している人物で、圧倒的に多いのが学生である。学生の私が選んだ対象作品だからというには、少し多すぎるだろう。学生が自転車に乗車しやすいのは、選択肢がないからということが大きいだろう。免許を取得するのが年齢的にも経済的その他の理由でも難しい学生は、自然と自転車を選択するのだろう。実際に学生が自転車に乗車する目的を見てみると、登校と帰宅が多くなっている。場所も通学路が多い。つまり、学生にとって自転車に乗車することは日常なのである。だからこそ、二人乗りという非日常なものが際立ち、作品内でも用いられ

続けているのではないだろうか。

学生に次いで多いのが親子である。町中でも最も見かけるのは、主婦が自転車に乗っている姿だろう。子どもが座るかごを付けた自転車は、主婦の代名詞となっている。そこから考えると、自転車＝主婦、親子というイメージは最近のものではあるが、十分に用いることのできるイメージだろう。もちろん、これは車で送り迎えはできないような層の話であって、そういったことから自転車が生活感といったものを感じさせるように用いられることもある。今回の対象作品である俵万智の「サラダ記念日」も、そういった用いられ方の一つだろう。

自転車は、配達員や警察官といった職業もイメージさせる。これらの人々は、車種の項目であった、実用車と共に登場することが多い。ママチャリが一般的に普及している現代において、実用車が出てくると自然と職業が想像されるだろう。このように、自転車は職業を象徴することもある。

- ・乗車している人物が主人公かそれ以外か

主人公	以外	主人公、以外	主人公	なし
数	70	33	31	25

ここでは、自転車に乗車している人物が、その作品の主人公であるかそれ以外の人物かに着目して分析を行っていきたい。分析を始める前の予想では、主人公が乗車している場面の方が多いと考えていた。しかし、表を見てわかるとおり、主人公以外の人物が乗車している場面が、主人公が乗車している場面の倍以上ある。これはどういうことなのだろうか。

手がかりを得るために、主人公とそれ以外の人物を比較してみる。主人公が自転車に乗車する場合は、目的地や人物像が描写され、どうして乗車するかが分かる。一方で、主人公以外の人物が乗車する場合は、目的地や人物についてのことが一つも書かれず、自転車に乗車しているということだけが書かれていることが多かった。つまり、主人公以外の人物が自転車に乗車している場面では、彼らの乗車する自転車は背景的な使われ方をしていると言えるのではないだろうか。なぜ乗車するかは問わず、ただ自転車を場面に設置しているのである。そういったように用いられた自転車は、多くの場合、都会の人混みとセットになっていた。背景的な用いられ方をした場合は、「乗車しているか」でもあったようなマイナスのイメージを与えているのだろう。

・乗車している人数

人数	1	2	なし	1×複数	3	5
数	74	38	33	10	3	1

(1×複数というのは、先ほどの分析項目で触れた、背景的に使われている自転車に乗車している人物を表している。)

乗車している人数は、一人乗りから順に多い。しかし、二人乗りがその半数もあるのは驚きだった。すでに何度か触れているが、規制されている現在も人気があるようだ。これだけ使われるということは、今回発見した役割以外にも複数の役割を持っていると考えられる。

これまでの分析の中で、二人乗りの自転車は、彼らの空間を作り出す役割があると述べてきた。しかし、それに加えて「送り届ける」という役割もあるのではと考えられる。二人乗りの場面での乗車する目的を見てみると、「病院へ送る」や「駅

へと送る」といったものがある。これらの場合は、物理的に対象を送り届けている。他のものも見てみると、「夢が夢で終わらないように（進む）」や「永い時の向こうまで君をつれて行く」といったように、ある状態へと同乗者を送り届けている。このように、二人乗りの自転車は、送り届ける、連れていくといった意味合いも持っている。以下はその例である。

	コブクロ「memory」
乗車	はい
車種	なし
場所	街
時間	授業を抜け出し
時期	なし
年齢	学生
性別	男、女
人物の特徴、職業	学生
主人公	主人公、以外
人数	2
目的	永い時の向こうまで 君をつれて行く
目的地	なし
速さ	街も風も すりぬけてくように

- 自転車に乗車する目的またはその目的地

目的	数
なし	83
帰宅	15
通学	5
配達	4
登校	3
人を探す	2
人に会いに	2
君に会いに	2
夢が夢で終わらないように	2
家に帰る	2
買い出し	2
海に行く	2
あの人に会いに	1
あの時の君の笑顔 思い出そ うとして	1
お使い	1
お見舞い	1
人を誘う	1
見舞い	1
パチンコ	1
下宿の婆さんに言われたから	1
主人公に発見を伝える	1
会いに行く	1
元気付ける	1
君に追いつくと	1
君を駅へ送る	1
唐沢くんと警察を呼ぶ	1

目的地	数
どこまでも	2
なし	96
グラウンド	1
パチンコ店	1
中禅寺	1
主人公	1
主人公の家	3
君の家	3
夢の国	1
学校	7
実家	1
家	22
店	2
橋	1
河原	1
海	3
氷屋	1
病院	2
福山	1
美術館	1
道端の木	1
道路	1
配達先	1
銀行	1
頂上	1
駅	2

夢の国へ	1
帰宅、話す	1
待ち合わせ	1
復縁のため銀行に	1
恋のうた	1
日の出を見る	1
永い時の向こうまで 君をつれて行く	1
父に会いに	1
町で遊ぶ、氷を買う	1
病院へ送る	1
移動	1
移動手段を求めて	1
舞踏会	1
話	1
返書を届けるため	1
逃げる	1
通報するため	1
遊びに行く	1
飲んだ帰り道	1

駐輪場	1
-----	---

なぜ自転車に乗車するのかというところから、自転車の用いられ方を探す項目である。自転車は移動手段なのだから、目的地くらいは書かれているのではないかと考えていたが、記述がない場合が多かった。「どこまでも」という項目があるように、目的地が重要なのではなく、移動すること自体を重要とする用いられ方がされているようだ。

乗車する人物の年齢・特徴、職業の項目にある、学生に関する分析でも触れたが、通学や帰宅が目的として上位を占めている。自転車本来の、移動手段としての役割が強い用いられ方である。その次には、配達が来ている。配達のように、職業により目的が作られるのも一つの特徴であると考えられる。

・自転車に乗車する人物のまとめ

この項では、人物から自転車の用いられ方の特徴を分析した。分析の結果は、

大きく分けて二つである。一つは、自転車に乗車するのは主に学生であり、それに伴った意味や役割を自転車を持つということである。もう一つは、二人で自転車に乗ることで、一人の時とは異なる意味や役割を持つということである。やはり、自転車に乗車する人物は、自転車の意味合いに関わってきていた。ここからは、自転車が用いられている作品の特性について分析していく。

第三項 対象作品について

・対象における場面の位置

場面	数
序盤	57
終盤	48
中盤	37
全体	5
序盤、終盤	4
中盤、終盤	3
序盤、中盤	3

作品全体の、どのタイミングで自転車が用いられているかを分析しようとして立てた項目である。結果は用いられ方の特徴を見つけることはできなかった。しいて言うなら、歌詞における自転車はサビなどの終盤において用いられることが多かった。自転車の持つ爽快感が、サビなどの盛り上がりと合うのだろうか。この項目については、さらなる分析が必要である。

・対象の発表年

年代	数
2010	52
2000	31
1990	41
1980	4
1970	1
1960	3
1950	12
1930	1
1920	2
1910	2
1900	7
1890	1

年代ごとに見ていくことで、自転車の用いられ方の特徴が現れてくるのではないかと分析する項目である。現代の自転車の原型となった自転車が1880年代に発明された。最新の技術だった自転車は、現代とは違い一般的なものではなかった。そのため、乗車している人物は学生などは設定されておらず、大人がほとんどである。また、夏目漱石の「夢十夜」などでは、文明の象徴として用いられており、現代の用いられ方とはずいぶん違う。今回の研究では、現代の作品をこそ分析したかったので、近代にまであまり手を出せなかった。近代から現代にかけての変化をより深く捉えることが今後の課題である。

・対象のメディア

メディア	映画	小説	歌詞	絵本	漫画	詩
数	78	45	32	2	1	1

表を見て分かるように、今回の研究では対象作品のメディアが大きく偏ってしまった。だからこそ見えたものもあったと思われるが、対象作品のメディアについては今後の課題としたい。

ひとまず、今回扱った主な三つのメディアの特徴について述べていきたい。まず、映画としている映像メディアは、当たり前ではあるが、車種、速度、人物などの情報が全て描かれている。小説や歌とは異なる部分である。また、背景的に自転車が用いられることも、他のメディアより多かった。映像という、情報量の多いメディ

アならではの特徴だと考えられる。今回は分析できなかったが、画面における自転車の進行方向を分析すれば、何らかの意味が見えてきそうである。

小説では、車種、速度、人物などの情報が書かれていないことも多かった。一方で、自転車の車種の部分で述べた通り、「つながれた犬みたいな置き去りの自転車」といったように、自転車に人物の感情を表すことなどがされている。また、描かれていないが、共通認識としてイメージできる部分をもっと抽出できれば、より自転車の象徴性を掴むことができるだろう。

歌詞では、小説以上に情報量が制限され、それゆえに象徴性を感じる用いられ方がされていた。

・対象作品についてのまとめ

発表年では自転車の普及と用いられ方の関係を分析した。自転車が文明の象徴のように用いられていたことは分かったが、まだまだ考察の余地が残っている。メディアごとの用いられ方を見るところでは、対象のメディアが偏ってしまったため、考察が進まなかった。以上のように、全体的にみて今後の課題が詰まった部分である。新たな発見の余地があるとして、機会があれば取り組んでいきたいと考えている。

第二節 分析結果についての考察

この章では、自転車が用いられている場面の要素を項目化して分析した。その結果をまとめると、作品に用いられている自転車の意味や役割を考える場合、次のような道筋を取るのいいだろう。まず、作品の特性によって与えられるものを考える。例を挙げると、作品の発表年または舞台とする年代により、自転車の意味や役割を見つけるということである。作品の特性によるものでは考えにくい場合、次は自転車の状態に目を向ける。乗車されているかいないかの違いには、意味や役割の大きな変化があった。最後に、乗車している人物について考えるのいいだろう。学生が乗車する場合とそれ以外の人物が乗車する場合では、自転車の意味や役割が大きく変わる。以上のようにすることで、その作品において自転車が持つ意味や役割を理解できるのではないだろうか。

第三章 まとめと今後の課題

第一節 　まとめと今後の課題

この研究では、なぜ自転車を取り上げた作品が流行っているのかという疑問から、自転車がどのような意味や役割を持つかを明らかにしようとした。その結果は、第二章で述べたように、自力や若さ、困難、覚悟、全力、騒々しさ、文明といったものを表したり、空間を作り出す働きをしていたりと、研究を始める前の予想より様々なものがあつた。それでも、研究対象とした作品の偏りなどで、発見できなかったものもまだまだあるだろう。それらが発見するためにも、今後、自転車が登場する作品に触れた場合には、今回の研究を踏まえて自転車の意味や役割を考えていきたい。

第二節 　終わりに

今回の研究で、自転車一つを取り上げても様々な意味や役割が見られた。普段何気なく目にしている他のものも、掘り下げていくと何らかの意味や役割が見えてくるのだろう。そういった細かい作品を見る視点に気づけたことは、今後役に立つだろう。また、研究を通してより自転車を深く知ることができたのも良かった。今までより、自転車が好きだと胸を張って言えるだろう。

最後に、研究を始めるきっかけを与えてくれたり、一緒に研究を頑張ったゼミ生の皆さんと、何より、こんなテーマの卒論も指導して下さった野浪先生に感謝を述べて終わりたいと思います。本当にありがとうございました。

参考

http://www.jba-rw.org/topics/aboutbicycle_histroy_1.html 日本自転車文化協会
著マイケル・ファーバー 訳植松晴夫「文学シンボル事典」（東洋書林・2005）